



Title	オノマトペのレトリック：擬音語・擬態語表現の創発に関する認知言語学的研究
Author(s)	井上，加寿子
Citation	大阪大学，2010，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58292
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	井 上 加 寿 子
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 4 1 3 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 6 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	オノマトベのレトリックー擬音語・擬態語表現の創発に関する認知言語学的研究ー
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 岩居 弘樹 （副査） 教 授 渡辺 秀樹 准教授 大森 文子

論 文 内 容 の 要 旨

日本語は、ヨーロッパの諸言語と比べオノマトベ語彙が非常に豊富な言語として知られ、英語の3倍以上ものオノマトベ的表現が存在するともいわれている（Crystal 1987）。実際、新聞や雑誌、広告、TV、文学作品、漫画など、書き言葉、話し言葉の別に関わらず、日本語ではオノマトベは様々な分野において幅広く用いられている。広義でオノマトベと称される語彙グループは、通例、生物の音声等を表す擬音語と、ものの運動や様態、感覚や心理状態を表す擬態語に大別され、音象徴性（sound symbolism）と非常に関連が深い語彙グループであるとされる。音象徴とは、特定の言語や特定の理論的枠組みに限定することなく、ある言語に内在する音と意味との結びつきをいうもので、オノマトベと音象徴の関連は、長年言語学とその関連分野の研究対象とされてきた。オノマトベはまた、音象徴性との関連とともに、創造性が豊かなことがその大きな特徴の一つとされている（質1993a, 1993b, 芋阪1999, 田守2002, 飯島2004など）。その一方で、オノマトベに関する従来の研究では辞書の記載語彙などを中心とした一般に認知度の高い慣習的な表現のみを取り扱うものが大部分であり、オノマトベ表現の生成的側面については研究が希薄であった。こうした背景から、本研究は、小説や詩、マンガ、コーパスなどから、既存のオノマトベ表現だけでなく、新奇に創作されたオノマトベ表現も広く考察の対象に含める。そして、諸言語に共通して見られる音象徴性とオノマトベ表現との関連に着目し、新造表現の創発の過程と、人間の認知的基盤である五感（視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚）の感覚間の転用関係を通してみられる比喩性に関し、認知言語学観点から考察を行うことを目的とする。

本研究では、まず、第2章において、慣習の度合いの高い一般的なオノマトベ表現の多義性について、五感との関連から意味拡張のプロセス明らかにした。オノマトベ表現は擬音語・擬態語の中間的用例を介して、比喩的な擬態語用法へと拡張していくものである。また、このような中間的用例は、〈聴覚〉と〈視覚〉、〈聴覚〉と〈触覚〉といった感覚を同時に描写するものであり、そこから〈視覚〉のみ、あるいは〈触覚〉のみなどのある感覚へ焦点化された表現へと、「同時性のメトニミー」（山口2003a, 2003b, 武藤（酒井）2003）として拡張する。そして、この場合、〈聴覚〉を表す語が他の感覚領域を表すのに用いられることから、〈聴覚〉を原感覚とした共感覚的比喩表現ととらえることができることが明らかとなった。第3章ではその議論を発展させ、語形自体は既存のものでも文脈に強く依存したオノマトベの新奇の用法への拡張例とその多義的側面に関し論じた。その結果、多義オノマトベの意味拡張について、複数の感覚の共起性に動機づけられた擬音語・擬態語間のメトニミー的拡張だけでなく、擬態語から擬音語、擬態語から擬態語といった、認知的多義に基づいた新奇の用法へのメタフ

一的拡張が見られることを明らかにした。第4章では、特に擬音語・擬声語に焦点をあて、英語の音放出動詞を例に、メタファー・メトニミーの特徴が見られることを、第3章までで論じた日本語オノマトベの拡張プロセスとの関連から論じた。つづく第5章では、擬声語動詞の比喩性について、メタファーとメトニミーの相互作用の観点から論じた。最後に、第6章では、新奇のオノマトベ表現に関する先行研究は文学作品を中心に扱ったものがこれまで主であったという背景をふまえ、小説や詩に加え、マンガのオノマトベに見られる新造表現を考察の対象に含め、新奇の表現形が創り出される際の言語化の傾向を整理した。そして、オノマトベの音韻・形態的特徴と意味の関連に着目し、音象徴の新奇のオノマトベ表現の創発への関連について論じた。

以上から、オノマトベの新造表現の創発について、本研究で得られた結論は次のように総括される。

- (1) オノマトベの多くは多義であり、擬音語・擬声語・擬態語用法の特徴からいって、五感、特に聴覚と深く関連する。オノマトベは、こうした複数の感覚領域を未分化な状態で表す語彙群であり、私たちはそれにより状況全体を認知する。オノマトベ複数の感覚領域を同時に表すという特徴をもつことから、慣習的なオノマトベの多義性は、同時に基づくメトニミーによって説明される。すなわち、複数の感覚領域にまたがる擬音語・擬態語の中間的用法から、ある感覚領域がプロファイルされ、意味が拡張する。
- (2) オノマトベの新奇の用法への拡張は、擬音語・擬態語の中間的用法、すなわち、聴覚とその他の感覚の同時性を介したもののだけでなく、擬音語から擬態語、擬態語から擬音語、擬態語から擬態語など、実に様々な拡張パターンがみられる。これらの新奇の用法は、オノマトベの慣習的な用法におけるプロトタイプの意味からの拡張例としてとらえられるものであり、その背景には、メトニミーの拡張とメタファーの拡張が相互に作用している。
- (3) 音放出動詞（擬音語・擬声語）が伝達動詞として用いられる用法には、2つの異なる拡張プロセスがある。1つは、「笑う」や「泣く」といった音の放出を伴う人間による行為（human acts）からの拡張で、当該の音の放出と発話が同時に生じるととらえる場合、〈行為〉・〈音の放出〉・〈発話〉の間に近接性（contiguity）あるいは同時性（cooccurrence）が存在するため、メトニミーととらえられる。
- (4) もう1つは、人間以外の動物などの有声物および無生物による音の放出を伴う行為からの拡張で、当該の音の放出と発話の様態との間に類似性（similarity）が存在するため、メタファーととらえられる。この場合、〈行為〉・〈音の放出〉・〈発話〉に同時性がないため、当該の音放出動詞は比喩的に用いられているととらえられるが、その背景にはメトニミーの用法との強い概念的つながり（conceptual link）があるため、厳密にはメトニミーからのメタファーととらえられるものである。
- (5) 新奇のオノマトベ表現の創発に関しては、これらの複数の意味・用法に基づく拡張に加え、慣習的な既存のオノマトベ語彙の音韻・形態的特徴から逸脱した言語形式が多くみられる。このように、オノマトベは、既存表現の音韻・形態的特徴および音象徴性に基づき、新奇の表現形が創発する。

以上のように、本研究では、オノマトベ表現の音象徴性と比喩性に関する日英語の比較、およびオノマトベ表現の慣習の意味から新奇の意味への拡張過程の考察を通し、認知言語学的観点からオノマトベのレトリックについて体系的に論じた。本研究は、オノマトベという創造性の高い語彙グループを研究対象とするにあたり、新造表現を単に例外として排除するのではなく対象に含めることで、従来の研究では不十分であった生成的側面に関する研究を補完するものであり、この点で、オノマトベと音象徴に関する今後の研究にさらなる示唆を与える独創的研究であるといえる。したがって、本研究による成果は、オノマトベ研究に新たな知見をもたらすとともに、新奇のメタファー表現や新語の創発といった、より幅広い主題へも貢献し得るものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語を中心に、諸言語に共通して見られる音象徴性とオノマトベ表現に着目し、新造表現の創発の過程と、人間の認知的基盤である五感の間の転用関係を通して見られる比喩性に関して、認知言語学の観点から考察し、その生成的側面を解明しようとしている。

序論に続き第2章では、オノマトベの多義性について概観し、共感覚比喩表現、聴覚と視覚、聴覚と触覚など五感の間の転用、同時性・類似性に基づく意味の拡張について分析を試みている。

第3章では、オノマトベの創造性と意味拡張と題して、既存のオノマトベから新造オノマトベへの拡張プロセス、オノマトベの多義性について論じ、ネットワークモデルの観点を取り入れた分析を行っている。そして、擬音語用法から擬態語用法へ、擬態語用法から擬音語用法へ、擬態語用法から擬態語用法へというパターンを分析し、新造オノマトベの拡張パターンを導き出している。

第4章では、メタファーとメトニミーに関する歴史的見解や両者の連続性に言及した上で、音放出動詞の意味と伝達用法、音の放出から意味の伝達への拡張について、英語の例を中心に論じている。

第5章では、イヌに関する擬声語動詞がヒトの行為をあわらす場合の比喩性について、英語コーパスからの用例を中心に分析を試みている。特に、これらの動詞の感情と鳴き声の結びつきとヒトの行為を表す場合の比喩性、

その拡張過程についての言及が非常に興味深い。

第6章では、まずオノマトベの音韻・形態について、先行研究を引用しながら概観し、オノマトベの音象徴、既存のオノマトベからの新造オノマトベへの派生・創発、全く新しい新造語形について、詩歌やマンガから収集した具体例をあげて考察している。

本論文は、これまで例外として扱われることの多かった創造性の高いオノマトベについて、その生成的側面を分析し、音象徴とオノマトベに関する示唆を与えたと言う点で意味のある独創的な研究であると言える。

文献資料の扱いに粗雑な部分があり、また分析に偏りがある部分が見られる点は非常に残念であるが、これらの点も、全体的に見て本論文の価値を損なうものではなく、豊富なオノマトベの実例をもとに多角的な分析を試み、独自の主張を展開しようとしている点は高く評価できる。

以上により、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと認める。